「デジタルONEアンバサダー」による業務システム内製開発とその効果

香川大学情報化推進統合拠点DX推進研究センター

「デジタルONEアンバサダー」の取り組み概要

- 香川大学は、職員による業務システム内製開発を奨励する「デジタルONEアンバサダー制度」を2022年4月1日に制定した
- 本制度のもと任命された職員は、**「デジタルONEアンバサダー」**（以下、アンバサダー）と呼ばれ、2025年度末時点では全常勤事務職員のおおよそ**70%**がアンバサダーの経験者となった
- ガートナーは、事業部門とIT部門で構成されるアジャイル開発チームを「フュージョンチーム」と定義した
- マイクロソフトは、「フュージョンチーム」による開発を**「フュージョン開発」**と定義した
- 香川大学の 「DXラボ」、「DX推進研究センター」、「デジタルONEアンバサダー」が、それぞれ「フュージョン開発」の「プロ開発者」、「ITプロフェッショナル」、「市民開発者」 の役割を担っている（図1）
- 「市民開発」とは、**非情報人材である事業部門**がローコード・ノーコード等の技術を用いてシステム開発をおこなう活動である
- アンバサダーは、**非情報人材である事業部門職員が任命**されており、アンバサダーによる業務システムの内製開発は、この「市民開発」の取り組みに該当する

アンバサダーによる業務システム内製開発

- DX推進研究センターはデータに基づいて市民開発を支援する方策を策定すべく、アンバサダーに取組状況の報告を依頼している
- **2025年度は92件**の報告が実施され、2022～2025年度**合わせて324件**の報告となった（表1・図2）
- 主な取り組み内容は申請受付業務、データ分析業務、AI活用業務など多岐にわたり、全学の様々な部署において業務システム内製開発が実施されている
- 取り組みには**40種類のツール**が使用されており、1件の取り組みあたり**平均2.6種類のツール**が使用されている

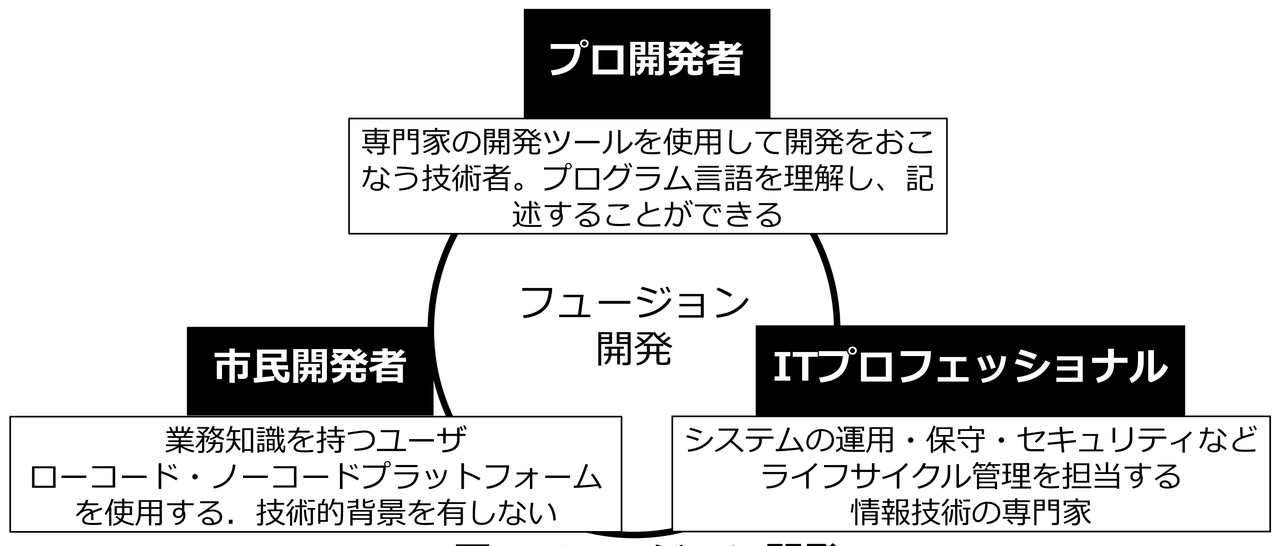


図1 フュージョン開発

表1 2025年度デジタルONEアンバサダー最終報告会で報告された7件の取り組み

項番	部署	取り組み事例	業務内容
1	教育企画課	教務システム「カダサポ」のID申請システムの開発	申請受付業務
2	医学部医事課	新規検査事業開始に伴う受付業務の自動化	申請受付業務
3	地域連携推進課 国際課	安全保障輸出管理 × 研究インテグリティ 2つの必須手続の統合と申請業務の一元化	申請受付業務
4	修学支援課	貸出ロッカー管理システムの内製開発 ～業務効率化と学生利用率向上に向けて～	申請受付業務 データ分析業務
5	情報図書課	図書館医学部分館演習室 web予約システムの開発について	申請受付業務 施設予約業務
6	農学部附属農場	作業記録アプリの開発	データ分析業務
7	広報課	香川大学を「AI名刺」でスマートに	AI活用業務

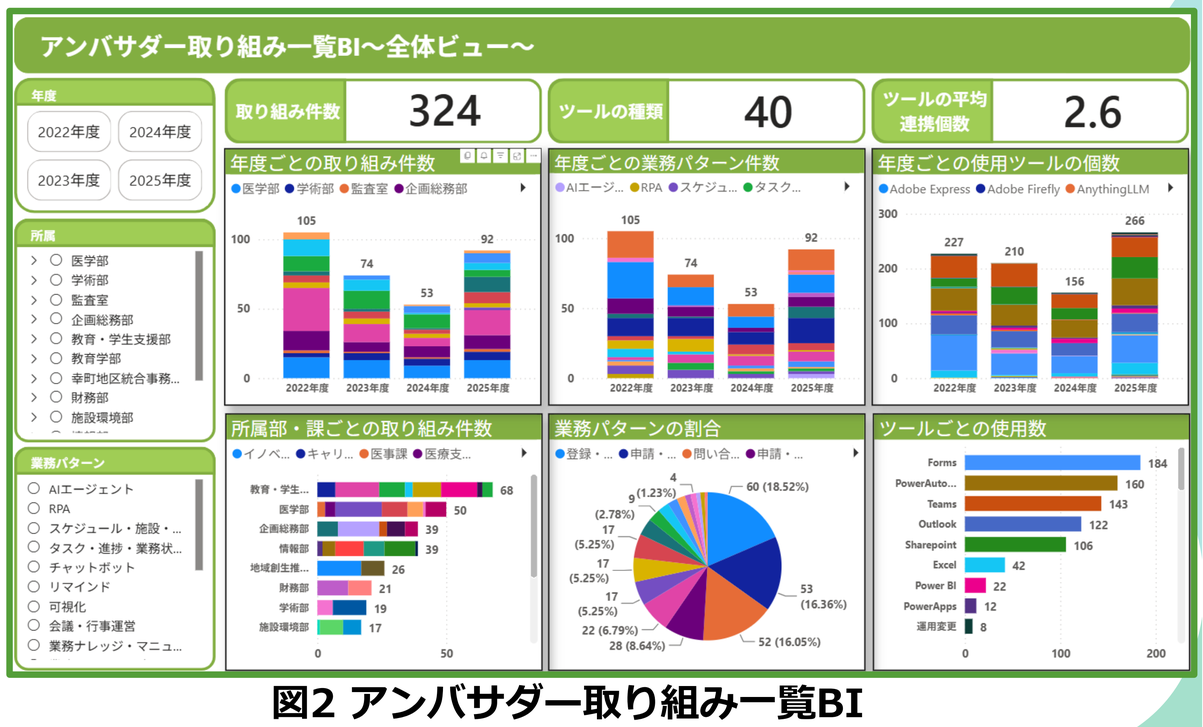


図2 アンバサダー取り組み一覧BI

アンバサダーによる業務システム内製開発の効果

- 活動報告では、**業務を見直す視点が身についた**ことや、**他業務への応用を考える**ようになったことなどが報告されている
- 1取り組み当たりの**平均使用ツール個数**が、2022年度の約2.2個から，2023年度約2.8個，2024年度約2.9個，2025年度約2.9個へと増加しており、取り組みが単一のツールの活用だけでなく、**複数のツールを組み合わせた業務改善へと広がっている**ことが確認できる
- 事例は最終報告会を通じて全学に共有されており、他部署での活用や既存システムの改良・再利用につながる可能性がある
- 「貸出ロッカー管理システム」や「AI名刺」では、開発した部署以外にも利用が広がっており、アンバサダーによる取り組みが個々の部署にとどまらず、**他部署へ横展開される事例**も見られている
- 2022年度および2023年度の取り組み179件を対象に2024年8月時点で運用状況を調査した結果、**145件（約81%）が継続して利用**されていた

考察：開発されたシステムの多くが運用され続けている組織的要因

①**業務知識（ドメイン知識）**を有する職員による市民開発
現場の実情に即したシステムを構築しやすく、開発後の運用定着を支えている

②市民開発を支える**フュージョン開発体制**
DX推進研究センター、DXラボおよび情報部が、ハンズオンや技術支援を通じてアンバサダーを継続的に支援していることが、専門的な技術知識を持たない職員による開発を可能にしている

③デジタルONEアンバサダーが**大学の制度**に位置づけられている
全常勤事務職員の約70%のアンバサダー経験者を輩出し，身近な業務に対する改善意識の醸成につながっている

